

【太政大臣兼家】(3)

「二郎君、陸奥守倫寧ともやすのぬしの女の腹におはせし君なり。道綱1ときこえて、大納言までなりて、右大将かけたまへりき。この母君は、きはめたる和歌の上手にておはしければ、この殿に（兼家）の通はせたまひけるほどの事、歌など書きあつめて、かげろふの日記にとなづけて世にひろめたまへり。殿のおはしましたりけるに、門かどをおそくあけたれば、度々御消息せうそくいひ入れさせたまふに、女君、

なげきつつひとりぬる夜のおくるまはいかに久しきものとかはしる

いと興ありとおぼしめして、

げにやげに冬の夜ならぬまきの戸2もおそくあくるは苦しかりけり

〔注〕○倫寧——藤原倫寧。娘には他にも菅原孝標の妻（『更級日記』作者の母）がいる。

○かけたまへりき——兼任なさっていた。○まきの戸——真木（良質の木材）でできた戸。

【語彙・文法】（○＝語彙・●＝文法・☆＝常識。ただし重なるところも）

●きこゆ ○おそく ☆消息 ○げに

【問い】

① 点線部1「道綱ときこえて」の敬語の種類・誰から誰への敬意かを答えよ。

② 点線部2を品詞分解して現代語訳せよ。

おそくあくるは苦しかりけり

③ 二首の和歌に共通する《掛詞》を説明せよ。

【参考】『蜻蛉日記』 上巻・天曆九年（九五五） 十月

これより夕さりつかた、「うちにのがるまじかりけり」とて出づるに、心えで、人をつけて見すれば、「町の小路こうぢなるそこそになむ止まりたまひぬる」とて来たり。

さればよと、いみじう心うしと思へども、いはむやうも知らであるほどに、二三日ばかりありて、曉方に、門をたたく時あり。さなめりと思ふに、憂くてあけさせねば、例の家とおぼしき所にものしたり。つとめて、なほもあらじと思ひて、

嘆きつつひとり寝る夜の明くるまはいかに久しきものとかは知る

と、例よりはひきつくるひて書いて、うつろひたる菊にさしたり。

かへりごと、「開くるまでも試みむとしつれど、とみなる召し使ひの来あひたりつればなむ。いとことわりなりつるは。

げにやげに冬の夜ならぬまきの戸もおそくあくるはわびしかりけり」
さてもいとあやしかりつるほどに、ことなしびたる。

〔注〕○天曆九年——兼家二十七歳・道綱母二十歳くらい・道綱一歳。 ○うちにのがるまじかりけり——兼家の言葉。「内裏に避けられない用事があるのだった」。 ○町の小路——京の

南北の通りの一つ。現在の新町通りにあたる。 ○さればよ——やっぱり思った通りだ。

○なほもあらじ——そのままにはしておくまい。 ○例よりはひきつくるひて——いつも

よりは改まって。 ○うつろひたる菊——霜にあたって花の色が変わった菊。 ○ことな

しびたり——何事もなかったかのように振る舞っている。

【文学史】

女流日記

Ⅱ 女性の手になる（Ⅱ ひらがなで書かれた）、自身の体験によるノンフィクション。

蜻蛉日記

……作者は男性（紀貫之）。最初の仮名日記。紀行文。一〇世紀前半に成立。

……作者は藤原兼家（道長の父）の妾（側妻）。一〇世紀後半。

……作者と親王たちとの恋を描いた歌物語的作品。一一世紀初め。

……作者は道長の娘に仕えた女房。記録＋随筆的。一一世紀初め。

……作者は受領の娘。『源氏物語』耽読の段が有名。一一世紀中頃。

……作者は堀河天皇に仕えた女房。亡き天皇を追憶する。一二世紀初め。

……作者は阿仏尼。所領をめぐる訴訟のため鎌倉に下る。一三世紀末。

……作者は後深草院二条。院や男たちの欲に翻弄される。一四世紀初め。

【文法基礎練】 希望・比況の助動詞

	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	活用の型
まほし							
たし							
ごとし							
（下接語）	―は ―ず	―し、 ―けり	―。	―とき	―ども	―！	

意味 まほし・たし…… ①希望（ ）

ごとし……… ①比況（ ） ②（ ）（ ）

接続 まほし……活用語の「 」形

たし………活用語の「 」形

ごとし………体言・活用語の「 」形・助詞「 ・ 」

* 「『ごとし』は語幹「ごと」だけでも使われる。また、形容詞型の「ごとくなり」「やうなり」も「ごとし」と同様に使われる。

【現代語訳】

「（兼家の）ご次男は、陸奥守藤原倫寧殿の娘の所生でいらっしゃる方である。道綱と申し上げて、大納言にまでなって、右大将を兼ねなされた。この（道綱の）母君は、この上ない和歌の達人でいらっしゃったので、この殿（兼家）がお通いになっていた頃の出来事、和歌などを書き集めて、『蜻蛉の日記』と名付けて世に広めなされた。（あるとき、）殿がいらっしゃったときに、（道綱母は）門をなかなか開けなかつたので、（兼家は）何度も何度も案内を頼みなされたが、女君は（こう歌を詠んできた）、

嘆きながらひとりで寝る夜が『明ける』までの時間はどれほど久しいものか、あなたは知っていますか（知らないでしょう？ 門を『開ける』のも待てないあなたは）

（兼家は）とても面白とお思ひになって、
本当に本当に、冬の夜ならぬ檣の戸も、夜がなかなか『明け』ないように、戸をなかなか『開け』てくれないのは苦しいものだったんだなあ
（とお返しになった。）

【参考の記】

この後の夕暮れごろ、(兼家が)「宮中で避けられない用事があるのだった」などといって出ていくので、腑に落ちず、人に後をつけて見に行かせると、「町の小路にあるそこそこに(兼家の車が)お止まりになりました」と言って帰ってきた。

やっぱり思ったとおりだと、ひどく不愉快だと思うけれど、どうやってやったらいいのかわからないでいるうちに、二三日ほどして、明け方ごろに、門をたたくことがあった。そう(兼家の訪れ)であるようだとは思うが、不快で開けさせなかったところ、例の家と思われる所へ行った。翌朝、そのままほうっておくわけにもいかないと思って、

嘆きながらひとりで寝る夜が『明ける』までの時間はどれほど久しいものか、あなたは知っていますか(知らないでしょう? 門を『開ける』のも待てないあなたは)と、いつもよりは改まった字で書いて、紫に変色した菊にさして送った。

(兼家の)返事。「あなたが門を」開けてくれるまで試してみようとしたのだけれど、急用を知らせるお召しの使いがたまたま来てしまったので(そちらへ行ったのだ)。(あなたが怒るのも)とてももつともなことだね。

本当に本当に、冬の夜ならぬ檜の戸も、夜がなかなか『明け』ないように、戸をなかなか『開け』てくれないのはつらいものだったんだねえ」

それにしても、(兼家は)とても不思議なくらい、何事もなかったようにしている。

☆『大鏡』『蜻蛉日記』でのこのエピソードには、どのような違いがあるか?

【さらに参考】工藤重矩『源氏物語の結婚』(中公新書・二〇一二年)

(正妻腹の子(嫡子)とそれ以外の女性との子(庶子)とでは、扱いの違いがあった)

兼家の男子、すなわち道長の兄弟の場合は、正妻時姫所生の道隆(九五三年生)、道兼(九六一年生)、道長(九六六年生)はいずれも十五歳で従五位下(道隆は中宮御給、他の二人は冷泉院御給)を叙されている。藤原倫寧の娘所生の道綱(九五五年生)も従五位下(冷泉院御給)である。

道綱は叙位年齢が十六歳で、時姫所生の男子に比べれば一年遅れているが、スタートに嫡庶の差はほとんどない。ただし、次の従五位上に昇るまでに要した年数が、道隆は六年、道兼は八年、道長は六年であるのに対して、道綱は十一年を要している。このあたりに差が出ているといつてよいかもしれない。(41〜42頁)

